テーマ：

「凛々子」で広げよう～食と人～

山口県光市立岩田小学校
田中　崇江　先生
●小学校１年　●生活科

この活動の特徴

「凛々子」活用のポイント①

収穫表にシールを貼っていくことで、収穫の喜びを実感

「凛々子」活用のポイント②

一年生でもトマトソースが作れた！体験で得た自信が次の活動に発展

「凛々子」活用のポイント③

ピザハウス開店！全校児童を招待して収穫の喜びをわかちあう

活動のねらい

●栽培・加工・調理などの体験を通して、食への関心をもつ
●「できた！」という体験を重ね、自分自身への満足感をもつ
●グループで活動したり、全校児童と関わりをもったりする中で、人とのつながりを意識しながら考え、行動する

活動の概要と流れ

対　象　学　年　：　１年生（３１人）
実　践　期　間　：　５月～２月

時期	学習活動
５月～常時活動	・収穫したら料理して食べようと話し合い、苗を学年園に植える。
	・水やりをし、アサガオとともに生長のようすを観察する。
７月～	・トマトの収穫が始まる。１つ収穫するごとに表にシールを１枚ずつ貼っていく。（夏休み中に収穫したものは冷凍庫で保存）
８月（登校日）	・収穫したトマトを生で試食する。
９月	・食べ方を話し合う。
	・トマトソースを作り、給食のオムレツにつけて試食する。
	・作ったトマトソースでピザトーストを作り味わう。
	・残ったトマトソースを家に持ち帰り、家族で味わう。
１０月	・全校児童を招待する「31 人のピザハウス」を企画。店名・メニュー決定、看板・チラシ・チケット作りをし、各学級に宣伝。開催。
２月	・感謝の気持ちを込めて、家族にトマトソースを使ったお弁当を作る予定。

ここがポイント！ 取り組みの工夫

植える時の「育てて食べる」目標が子どもたちの活動意欲に

担任が以前２年生で「凛々子」を育て調理した経験があった。「凛々子」は育てやすく、また、食べられることは子どもたちの励みにもなるため、定植の際に「収穫したら何か作ってみんなで食べよう」と目標をたてて取り組みをスタートした。

各自、学年園に植えた自分の苗に水やりをし、生長の様子を観察した。学年園は子どもたちが利用する昇降口の近くにあるため、目が届きやすいことは良かった。

収穫表にシールを貼ることで、収穫の喜びを実感

収穫したら表に収穫した分のシールを貼っていくことにした。シールを下から貼っていくと、後半、子どもたちが届かなくなってしまうので、表は横長にして子どもたちがいつまでも貼れるよう工夫した。

夏休み中の登校日を利用して全員で収穫し試食。体験の共有が次の活動へつながる

８月１日の登校日には、全員で収穫を行なった。学年園へ行くと真っ赤な実がたくさんついていて、子どもたちから「わ～っ！」という驚きと喜びの声が上がった。当日は２６６個を収穫、ガスの火で焙って皮をむき、生でそのまま試食した。

夏休み中は、担任が収穫を続け、シールを貼っていった。今年の夏は猛暑と少雨に悩まされたが、最終的に９３８個もの収穫があり、収穫表は全長約 1.5mにもなった。

“自分で”作ったトマトソースの味が、次の活動へ発展

夏休み明け、みんなで食べ方を話し合った。様々な料理が候補に挙がったが、どんな料理にも使えることからトマトソースを作ることにした。冷凍しておいたトマトを水につけて皮をむき、担任が用意した玉ねぎとにんにく、ローリエと一緒に煮込んでトマトソースを完成させ、給食のオムレツにつけて食べた。

このトマトソースを使って、翌週は自分の好きな具を持参し、ピザトーストを作って収穫パーティーをした。残ったトマトソースは家の人にも食べさせたいと、各自家に持ち帰り、家族と一緒に味わった。

みんなで話し合って決めた「31 人のピザハウス」を開店

さらに、残ったトマトソースを他学年の人にも味わってもらいたいと、全校児童を招待してピザハウスを開くことにした。開店準備から当日の運営まで、自分たちの経験を生かしながら楽しく取り組み、多くの人と触れ合うことができた。

興味・関心を高めた取り組み

「３１人のピザハウス」計画から実施まで

トマトソース作りの際、他学年の児童が家庭科室に来て、興味深そうに眺めていた。そこで、残ったトマトソースを、いつも優しくしてくれる他の学年の人にも食べさせてあげたいという意見が出て、簡単に作れるギョーザピザを全校児童にふるまうことにした。

「31人のピザハウス」という名前でお店を開くことにし、3種類のピザメニューを決め、グループ分けをした。また、全校児童約200人分のチケットや、紙に模様パンチで穴を開けたお皿を用意したり、チラシを作って給食時間に各クラスに宣伝に行ったりと、子どもたちは楽しみながらお店の開店準備をすすめていった。

開店当日は朝から、トマトソースと担任が用意した具材をギョーザの皮にのせ、全校分をホットプレートで焼いた。各学年、都合の良い時間にチケットを持って家庭科室に来てもらい、3種類から好きなピザを選んで食べてもらった。早く売り切れた班は、他のグループを手伝うなど、全員で協力し合い、3時間目には大盛況のうちに閉店・片付けを終えた。後日、他学年から御礼の手紙をもらい、子どもたちの喜びと自信につながった。

子どもたちの気付き、実践の成果

トマトソース作りで得た自信が、食への興味・関心を高める

トマトソース作りは、担任とサポート教員１名の２名で実施した。玉ねぎ等は担任が事前に用意し、トマトの皮むき、切る、煮込む作業を児童が行なった。できたトマトソースを給食の「ほうれん草オムレツ」につけて試食すると、トマトやホウレンソウ、オムレツが苦手な子どもも食べることができた。

その後の給食も偏食が少なくなり、使っている具材や味付けにも興味を持つ会話が増えた。自分たちでトマトソースが作れた、という驚きと喜びから食への関心が高まった。

過去の経験をいかして自ら考え、やりとげたことで、達成感と自信につながる

「他学年にも食べてもらいたい」という声から計画したピザハウス。ピザトーストの手順と変わらず、簡単に作れるギョーザピザを担任が提案すると、保育園で食べた経験のある児童からの「おいしかったよ」と一言。メニューはギョーザピザに決まった。

準備でも過去の経験から運営の仕方を考えたり、お客さんの立場になって話し合ったりすることができた。さらに、宣伝活動やピザハウスでのチケットのやり取り等で全校児童と触れあったことは、喜びと自信につながった。

体験したことで広がる豊かな表現力

さまざまな体験によって、活動が「楽しかった」の一言で終わらず、「手が凍りそうだった」「ぶくぶくなっていた」「ざくざく切れた」など、その子ならではの表現が生まれ、体験と言葉をつなげる学習ができた。

■生活科カードより

「ぼくは、ピザをつくりました。おかあさんもおねえちゃんもおとうさんも、おいしいねといってくれたので、うれしかったです。ぼくは、みんなのをつくったから、いそがしくてたべるのが一番さいごでした。おいしかった。」

「こころのなかで、おいしいとおもいました。みんなもおいしいといってくれました。おいしいとパパがさすってくれました。おいしいといいながら、わたしのあたまをさすってくれました。みんなえがおになりました。」

先生から一言！　実践を通して

私は、現在の社会生活の中で子どもたちの豊かな心の育成のためには、人・物・自然とのふれあい活動体験を積極的に取り入れることが必要だと考えています。「凛々子」はあまり手をかけなくても丈夫に育ち、たくさん実をつけてくれるので子どもでも育てやすく、収穫しやすいのが良いですね。また、活動に広がりを持たせることができるため、子どもたちはもちろん、保護者の方にも喜んでもらえる、活動体験にふさわしい素材だと思います。

受賞理由

トマトソース作りから全校児童を招待したピザハウスの開店まで、１年生とは思えないくらい充実した活動を、みんなが主体的に取り組んでいてスゴイね！「おいしかった」で終わらず、「周りの人にも食べて欲しい」と思った、その優しい気持ちが、ボクはとっても嬉しかったんだ。
夏休み中にかかってしまう収穫も、登校日を上手に利用してみんなで一緒に収穫して食べたことで、夏休み明けの調理活動へと、意欲も途切れずグッと高まったんじゃないかな。
シールを貼っていく収穫表など、オススメの実践アイデア満載のすばらしい取り組みに拍手！！